D 137　児童・生徒における肥り痩せの意識

大妻女大人間生科研　○植竹　桃子
大妻女大家政　松山　容子、伴　浩美

目的　現代社会には様々な情報があふれており、その中に「痩せているのが良い」と言うような風潮がみられ、問題とされている。著者らは既に、成人には強いスリム志向があり、それが衣服の選択行動にも影響していることを明かにした。そこで今回は、小・中・高校生が自分のからだの「肥り痩せ」をどのように捉えているのかを、衣服の選択行動との関係において、検討した。

方法　1)対象：小学校4・5年生、中学校1・2年生、高校1・2年生の男女、それぞれ約350名の計2100名。2)調査資料：　無記名の質問紙調査を1990年10月～12月に行なった。主な調査項目は、①自分の身長・体重に対する意識、②自分のからだの中での「気に入らない部位」、③外出する際の私服選びのポイント、である。

結果　①身長・体重に対する意識は、小学生では低い。中学以降、女子では身長が高く体重が軽いというスリム志向があらわれ、男子ではどちらかと言うと身長が高いことを望む傾向があらわれる。②自分のからだの気に入らない部位は、男子小学生では少なく、中学生以降で多く出現するようになる。女子では、小学生の時からその出現率が高く、特に部位としてはふともももとふくらはぎ、おなかのあたりがあげられている。③自分の服への関心度は、小学生では低いが、中学生以降で、「自分の好み」、「清潔さ」を重視する傾向そしてあらわれ、関心度は一般に女子の方が高い。以上のように、成人にみられるスリム志向は、特に女子で、中学・高校生の時点からあらわれていることが認められた。しかし、スリム志向と衣服の選択行動との結びつきは、明確なものには至っていないようである。